

The Production of Sundries made from Paper in Modern China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/35888

近代中国における紙関連製品の生産について

周 如軍^{1*}

2012年9月7日受付, Received 7 September 2012
2012年10月15日受理, Accepted 15 October 2012

The Production of Sundries made from Paper in Modern China

Rujun ZHOU^{1*}

Abstract

Various handmade sundries and materials made from paper were produced in modern China. Among these sundries, the author has already researched the production trends of traditional paper umbrellas in modern China. Therefore, the main purpose of this research is to examine the production trends of other sundries made of handmade paper. The main material for sundries such as firecrackers, fans, and foils was handmade paper, and the production of those sundries was popular in Zhejiang Province, Hunan Province and Jiangxi Province. These were traditional production areas for the paper industry. A problem however was that the handmade paper was predominantly produced in farm villages in the mountains but the final product was manufactured elsewhere. In other words, the manufacturing process differed according to the location, and relations between the various locations were limited. There were some areas where the production levels increased to unprecedented levels. There were also significant differences in the type and amount of products produced in different locations. Some areas for example focused almost exclusively on tin foil. Traditional domestic tin foil was often used in religious ceremonies, and imported tin foil was less popular. Therefore, competition between imported and domestic tin foil was virtually non-existent. The demand for domestic handmade paper products helped to maintain the traditional paper industry firmly in modern China.

Key Words: China, modern, hand-made paper, paper-umbrella, improvement

キーワード: 中国, 近代, 紙, 爆竹, 扇子, 錫箔

I. はじめに

筆者は, これまで近代中国における在来製紙(土紙)業について, その全国的な展開状況を概観するとともに, 主要な生産地となっていた浙江省, 江西省, 福建省における生産動向を中心として論じてきた^(注1)。

筆者のこれまでの考察によって, 近代になって機

械製紙(洋紙)が中国に流入してからも, 土紙が洋紙とは異なる多様な用途によっても支えられて, 土紙業が根強く存続していたことがわかった。また, 土紙の生産地には, 近代になって土紙業が徐々に衰退していった地域と, むしろ近代になって土紙業が新たに勃興して発展していった地域があった。このことは, 前近代的な土紙業が近代になってもそのまま残存し続けていたということではなく, 一定程度

¹ 金沢大学外国語教育研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Foreign Language Institute, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

* 連絡著者 (Author for correspondence)

の再編を伴いながらも、新たに展開していたことを示している。

それとともに、筆者は、各地において生産された土紙が様々な手工業製品の原材料としても用いられており、それらが各地域の経済において重要な意義を持っていたのではないかと考えるに至った。これに関しては、土紙業の場合と同様に、これまでほとんど全く論じられることはなく、筆者が土紙を主要な原材料とする最も著名な紙関連製品である紙傘の生産動向について論じたものがあるにすぎない^(注2)。

そこで、本稿では、このような土紙を主要な原材料とする紙関連製品のうち、紙傘を除く、花火（爆竹を含む）、扇子、錫箔について、まずその概観を述べた後で、それらの主要な生産地である各省における生産動向を論じたい。だが、これらに関する文献資料は極めて少ない上に、極めて断片的でもあり、紙傘に関する分析に比してやや精確さに欠けることが予想される。

なお、前稿までと同様に、本稿においても史料・資料などからの引用部分をも含めて、原則として常用漢字と算用数字を用いることにした。

II. 花 爆

1) 概 況

花爆（花炮）は、「煙花」（花火）と「鞭炮（辺炮）」（爆竹）の総称であるとされている^(注3)。そもそも、初期の爆竹は火薬を竹筒に装填していたので爆竹と呼ばれていたが、爆裂時に竹片が飛散して極めて危険だったので、後に竹筒に代わって紙筒が用いられるようになったという^(注4)。こうして、爆竹・花火の主要な材料として大量の土紙（手工製紙）が使用されるようになった。

爆竹・花火の生産は、宋代から発展を続け、広東省の東莞・南海、広西省の北海・合浦、湖南省の瀏陽・醴陵、江西省の万載・萍鄉などが中心的な生産地となっていたとされている^(注5)。

さて、「辺炮」（爆竹）を生産していた主要な省と全国の合計額を表している表1を見てみよう。中華民国初期の1912～21年における爆竹の生産額は、1915年にピークをむかえた後に急激に減少しており、1920年にはピーク時の10分の1以下になってしまった。また、1912年には広東省が最も多く、これに湖北省と江西省が次ぎ、1914年には湖南省が最も多く、

表1 「辺炮」の生産額の動向（1912～21年）（単位：元）。

Table 1 Production of fire-cracker, 1912-1921.

年度	合計	浙江省	広東省	四川省	江蘇省	湖北省	江西省	湖南省
1912	9,675,757	226,151	3,617,013	435,759	281,176	1,220,019	1,073,262	715,403
1913	10,646,941	—	—	—	—	—	—	—
1914	6,658,652	227,607	1,020,399	593,740	317,563	691,818	75,649	1,649,725
1915	11,733,671 (12,147,535)	—	—	—	—	—	—	—
1916	2,104,479 (3,199,828)	—	—	—	303,601	685,780	75,849	500,280
1917	5,058,158	261,186	1,043,156	—	325,032	619,969	1,763,010	231,544
1918	4,663,025	1,072,238	—	—	359,145	674,301	1,765,001	—
1919	1,601,692	256,231	—	—	409,462	—	—	—
1920	1,078,359	—	—	—	500,208	—	—	—
1921	—	—	—	—	546,514	—	—	—

典拠）農商部総務庁統計科編纂『中華民国元年・第一次農商統計表』上巻（上海中華書局、1914年3月）・同『中華民国2年・第二次農商統計表』（1915年6月）・同『中華民国3年・第三次農商統計表』（1916年12月）・同『中華民国4年・第四次農商統計表』（1917年12月）・同『中華民国5年・第五次農商統計表』（1919年2月）・同『中華民国6年・第六次農商統計表』（1920年8月）・同『中華民国7年・第七次農商統計表』（1922年2月）・同『中華民国8年・第八次農商統計表』（1923年5月）・同『中華民国9年・第九次農商統計表附十次農商統計表』（1924年6月）より作成。ただし、1916年は「辺炮」を含む紙製品となっており、また、「—」はデータがないことを示している。なお、1913年と1915年は合計額しかわからず、1915年以降は統計数値を収集できない省が生じており、また、1915年と1916年の生産額合計は次年度の統計によってカッコ内の数値に修正されている。さらに、1921年は、河南・山西・江蘇・安徽・陝西・察哈爾の6省のみの統計にとどまっている。

これに広東省が次ぎ、1917年には江蘇省が最も多く、これに広東省が次ぎ、1918年には江西省が最も多く、これに浙江省が次ぐなど、爆竹生産の興亡・変化が激しかったことが見て取れる。そして、爆竹の生産は、当該時期を通じて広東省と湖北省では激減していったのに対して、江西省や江蘇省ではむしろ増加していた。

だが、いずれにせよ、以上の統計資料が極めて不備であることから、中国の全国および主要な各省の近代における「花爆」（花火・爆竹）の生産動向を精確に把握することは困難であると言わざるをえない。

そこで、以下では、文献資料によってその概況を知ることができる湖南省・江西省・浙江省・広東省・山東省の各地における爆竹の生産動向について見ておきたい。

2) 湖南省

湖南省における爆竹の製造は唐代に始まり、宋代末に発展し、清朝乾隆年間には省東部の平江・瀏陽・醴陵、省西部の沅陵・永綏・乾城・瀘溪・鳳凰・芷江・晃県・会同・靖県、省南部の衡陽・郴州などが中心的な爆竹の生産地となった。ただし、地域的には省東部は省南部の広さに及ばず、しかも、爆竹の生産額では省西部が省東部よりも多かった。このうち、省東部の瀏陽県は、清朝嘉慶年間初期に特に爆竹製造業が発展し、同治年間になると、広東省・山東省・山西省から商人が買付に来るようになったが、光緒年間初年に湖南省の商人が上海・東南アジアへの販売を試みると、その販路はますます拡大し、1916～17年には台湾・福州・廈門や沿海各地にまで販路が拡大していった。また、瀏陽県に隣接する醴陵県や平江県でも清末の光緒年間に爆竹製造業が発展したただ、それらの製品は全て「瀏陽爆竹」の名で販売された。他方、省西部と省南部における爆竹の製造は、清末に一時的に旺盛にはなったが、販路は付近の県に限られ、省外に移出されるものは極めて少なかった。しかも、1927年以降は省の辺境がしばしば「匪擾」（匪賊の騷擾）を被り、爆竹製造業は衰退していった^(注6)。

瀏陽県における爆竹の製造は、家内副業の一種にすぎなかったものの、最盛期には農閑期に爆竹の製造に従事する者が30万人余り、作業場が300軒余り、労働者が2,500人余り、販売量が14万箱以上に達した。

ただし、1930年になると、「匪患」（匪賊の騷擾）によって生産量が激減した^(注7)。

このように、近代以降も爆竹製造業が発展し続けた瀏陽県は、清朝乾隆年間には湖南省内における爆竹の中心的な生産地になり、嘉慶年間初年には爆竹の製造量は14万箱を超え、1872年には県城の南市街、南部の大瑤鋪・金鋼頭・文家市・楊花一帯に「鞭炮作坊」（爆竹を製造する作業場）が300軒余り創設され、約500人の労働者を擁して25万箱の爆竹が製造された。当時、湖南省には広東省・山西省・山東省からも商人が陸続と買付に来ていた。そして、隣県の醴陵県や江西省萍郷の爆竹も瀏陽県を経て販売されたので、これらは全て「瀏陽爆竹」と呼ばれていた。こうして、湖南省瀏陽県の爆竹製造業は1916～17年に最盛期をむかえ、県内で爆竹の製造に従事する労働者が20万人を超え、年間20万箱余りの爆竹が生産された。だが、1930年に国民党軍が湖南省内でも圍剿戦争（共産党軍支配地域に対する包圍殲滅作戦）を開始してから爆竹の移出は阻害され、「鞭炮作坊」は200軒余り、労働者は568人、生産量は4,000箱余りに減少した。さらに、1932年には南京国民政府は爆竹を迷信的なものと見なして生産・販売を禁止した上に重税を課した。ただし、その後、地方からの抗議を受けて南京国民政府は命令を撤回したために、爆竹の生産は回復し、1936年には生産量が20万箱にもどった。ところが、1937年に抗日戦争が始まると、輸出は途絶え、国内市場も日々縮小し、生産量も大幅に縮小し、1940年には生産量が3.9万箱となってしまったが、抗日戦争勝利後には生産量が回復して1947年には8.2万箱、1948年には14.5万箱となった^(注8)。

また、醴陵県における爆竹の製造は城区と東部の白兔潭・普口市・潼塘市・麻石鎮などにおいて最も盛んで、農閑期に爆竹の製造に従事する者は6万人以上だった。なお、醴陵県における爆竹の製造の最盛期だった1922～29年には、広東省から買付に来る商人が非常に多く、年間の販売量が10万箱以上に達した。だが、1930年以降は、「匪擾」のためや広東省への移出量が激減したために、爆竹製造業は衰退していった^(注9)。

そもそも、醴陵県における爆竹の初期の生産地は麻石とその近隣の富里・潼塘一帯だったが、清朝咸豊・同治年間になると、その生産地は官寮（南橋）・

白兔潭・仙石・浦口・王坊などの一帯へも拡大し、年間生産量が1～5万担となり、光緒年間には輸出されるようになった。ただし、すでに見たように、輸出は隣県の瀏陽を経て行われていた。そして、1926～28年には爆竹を製造する「作坊」（作業場）が1,000軒近くにまで増加し、年間生産量も10万箱に達し、東南アジア・東北アジア・日本・欧州などへも輸出されたが、1929年には生産量が5万箱にまで激減してしまい、1932年からは花火の生産も開始したが、その生産量は多くはなかった。やがて、抗日戦争が勃発すると、交通が阻害されて年間生産量は3.2～4万箱に減少し、日本軍が醴陵を占領すると、爆竹・花火の生産は停止してしまっ、抗日戦争勝利後には漸次回復して年間生産量が約2万箱となった^(注10)。

さらに、平江県における爆竹の製造地は南部と城区に集中しており、1930年代には県南部の従事者は2,000戸余りとなっていた^(注11)。

一方、省西部における爆竹の製造地は、瀘溪県では第1区浦市鎮であり、全県で400軒余り・労働者1,300人余りが従事し、乾城県では首郷鎮・溪郷で、全県で200軒余り・労働者780人余りが従事し、永綏県では吉岡・茶洞で、全県で20軒余り・労働者70人余りが従事し、沅陵県・鳳凰県・芷江県・晃県・会同県・靖県では県城区で各県数十軒が従事していた。また、省南部の衡陽県と郴州の爆竹製造地は県城区に集中し、各々26軒と17軒が従事していた^(注12)。

爆竹の原料の1つである紙は、竹類から作られていたが、瀏陽県では爆料紙と呼ばれており、当該地で生産されていた。また、醴陵県では点張紙と呼ばれており、江西省萍郷から購入し、平江県の爆竹紙は益陽から購入し、また、省西部の瀘溪県・靖県・永綏県などの爆竹紙は宝慶から購入し、芷江県では龍市の炮紙を使用していたが、沅陵県・乾城県・鳳凰県・晃県・会同県では「土産紙」を使用し、さらに、省南部の衡陽県・郴州では衡陽県の金華紙を使用していた^(注13)。

以上のように、近代以降も瀏陽県において爆竹製造業が発展したのは、その原材料の一部である土紙の生産が盛んだったことが関係していると考えられる。すなわち、瀏陽県では1924年に7,445トンの土紙が生産され、1925年には土紙の生産は最盛期をむかえたが、1927～1930年に国民党軍による共産党軍支配地域に対する围剿戦と経済封鎖によって土紙業は

破壊された。そして、1937年には3,400トンの土紙が生産されていたが、1944年には土紙の生産量は1,900トン余りとなってしまった^(注14)。

瀘溪県の爆竹は、清代には漢口や南京ばかりでなく、東南アジアへも輸出されたが、抗日戦争中の1939年には爆竹の製造に従事する者は59人で、常德や洪江などに販売され、抗日戦争勝利後の1947年には爆竹の製造に従事する者が138人に増加した^(注15)。

衡陽県では、清末の最盛期に8万担（1担は約50kg）の土紙が作られ、その中には爆竹紙も含まれていた。そして、戦時中の1941年にも8万担の土紙が生産されていたが、1944年に日本軍が衡陽を占領すると、土紙の生産量は1,000担にも達しなくなった^(注16)。

3) 江西省

『瀏陽県志』には江西省萍郷の爆竹が湖南省瀏陽県を経て販売されていたので、「瀏陽爆竹」と呼ばれていたという記載があり^(注17)、また、『万載県志』には万載県と並んで萍郷が江西省における爆竹の中心的な生産地だったとされているが^(注18)、萍郷の新編市志には爆竹に関する記述は全く見えない^(注19)。

まず、民国『宜春県志』によれば、民国時期の宜春県における花爆の生産額は約20万元に達し、慈化における生産量が最も多かったという^(注20)。

また、万載県は「花爆之郷」と称され、清代光緒年間には同県において生産された爆竹を同省ばかりでなく、広東省や福建省などにも販売し、清末民国初期には爆竹・花火の生産に従事する者は日増しに多くなって約3,000人となった。そして、万載県内で最も生産量が多かった株潭だけでも、1918～19年には年間1.4万箱余りの爆竹・花火が生産された。だが、1938年には抗日戦争の影響を受けて販路が縮小して生産量は2,000箱にまで減少した。抗日戦争終結後、生産は回復し、1948年には1.5万箱余りの爆竹・花火が生産された^(注21)。

なお、江西省は近代においても土紙の主要な生産地だったが、土紙の生産地と花爆の生産地とはほとんど一致していなかった。

4) 浙江省

浙江省における爆竹の生産は清代に隆盛を極めたが、1930年代には爆竹の生産に従事する者は激減し、爆竹を製造する家は、金華県に4軒、蘭谿県に17軒、

麗水県に6軒、松陽県に10軒余りとなった^(注22)。そして、意外なことに、以上の金華県・蘭谿市・麗水市・松陽県の新編県市志には爆竹および爆竹紙に関する記述は全く見られない^(注23)。

なお、浙江省では、爆竹の主要な原材料の1つである爆竹紙には、当地で作られた紙（土紙）が用いられたが^(注24)、浙江省も土紙の主要な生産地と爆竹の主要な生産地とは全く一致していなかった。江西省と同様に、浙江省においても原材料（土紙）の生産地と製品（花爆）の生産地との間には地域間分業の関係が成り立っていたと考えられる。

5) 広東省

広東省における爆竹・花火の輸出額は、1887年に100万両余りとなり、1918年からは年間1,000万銀元に達し、1926年には爆竹・花火の生産に従事する者が数万人に達したが、やがて、第二次世界大戦中に、日本軍が東南アジアを占領すると、広東省からの爆竹の輸出額が減少し、従事者も1.5万人余りに減少した。ただし、1948年に最盛期を迎えると、広東省における爆竹・花火の生産額は1,200万元余りとなり、世界における爆竹の販売量の約40%を占めた^(注25)。

なお、広東省における爆竹の製造は、広州市郊外の広三鉄道沿線において盛んで、華僑へ輸出されるものが年間3.5万両となり、中国全体の半分にも達していたという^(注26)。

広東省の爆竹紙には、広東省の「東江・北江」で生産されたものが用いられていた。広東省の爆竹はおもに輸出されていたが、国内では上海や澳門などがその市場となっていた。商人の報告によれば、1936年の生産見積もり高は約100万元余りで、1923年における輸出額が最も多く、281万海関両余りだった。その後、輸出額が減少していったが、その原因は世界的不景気と国内外の市場が漸次外国の爆竹業者に侵蝕されたことにあり、しかも、澳門にも爆竹工場が増加し、大量に輸出するようになったという^(注27)。

東莞における爆竹・花火の生産はすでに清代中期に全盛期を迎えており、1842年に5港が開港されてからは爆竹・花火が海外にも大量に輸出されるようになり、1887年には爆竹の輸出額は白銀100万両以上になった。そして、1918年には爆竹を製造する「作坊」がそれまでの200軒余りから470軒余りに増加し、国内販売量も大幅に増加した。ところが、1931年の9・

18事変（満州事変）以降は生産が減少し、さらに、1938年10月に日本軍が侵攻してくると、日本軍は民間人が火薬を生産することを厳禁したので、東莞における爆竹・花火の生産は停頓したが、抗日戦争勝利後は生産が漸次回復し、1946～49年には年間平均20万箱余りの爆竹・花火が生産された^(注28)。

南海県には、抗日戦争直前の時点で爆竹を製造する工場が70軒余りあり、その他に「爆殻」（爆竹の紙筒）を専門に製造する工場が30軒余りあった。だが、抗日戦争期に日本軍によって占領されると、民間人が火薬を持つことが厳禁され、生産が停止したが、抗日戦争勝利後には急速に回復し、爆竹を製造する工場は171軒に増加し、「爆殻」を製造する工場は35軒となった^(注29)。

仏山県では、抗日戦争前に爆竹を製造する作業場が178軒あり、また、それに従事する者が240人おり、年間10,324,484kgの爆竹を生産していたが、抗日戦争期に日本軍が仏山県を占領すると、作業場が53軒、また、従事する者が80人となってしまい、生産量も2,949,852.5kgにまで減少した。そして、抗日戦争勝利後は、爆竹の製造に従事する者が抗日戦争前とほぼ同じ水準の170軒、238人にまで回復したが、年間生産量は抗日戦争前のほぼ半分程度の5,530,973.5kgにとどまった^(注30)。

なお、潮州城南門古一帯においてもすでに明清時代には爆竹・花火を製造する「作坊」があったというが^(注31)、1949年以降は生産が東莞や南海に遠く及ばなくなり、製品は全て当地で消費されたとされており^(注32)、民国期における状況は全く不明である。ただし、潮州では「花灯」（飾り提灯）の生産が盛んで、その材料の一部として紙が使われていた^(注33)。

6) 山東省

山東省の爆竹製造業は清朝末期に始まり、民国期（おもに北京政府期）の1912～27年が最盛期だったが、山東省において爆竹を製造していたのは在平県だけで、南京国民政府が迷信打破運動を展開して「迷信」を禁止するようになると、爆竹の販売は激減してしまった。そして、山東省在平県勾梭店史官屯一帯では、爆竹を製造する作業場が750軒、それに従事する者が5,250人に達しが、すべてが家内手工業だった。ただし、そのうちの10軒はやや規模が大きく、5～16人の労働者を雇用していた^(注34)。なお、原料の

うち、表芯紙は済南から購入し、また、黄草紙は当地のものをういた。そして、製造された爆竹はおもに山東省内に販売された^(注35)。

7) 小 括

湖南省瀏陽を除くと、主要な爆竹の製造地は原材料の土紙の生産地とは一致せず、地域間分業が成り立っていた。また、爆竹の主要な製造地のうち、とりわけ湖南省と江西省は第一次国共内戦の主戦場だったこともあって、爆竹製造業は大きな打撃を受け、さらに、抗日戦争期にはほとんどの省において衰退していったが、抗日戦争後は生産が急速に回復していった。

Ⅲ. 扇 子

1) 概 況

扇子には、羽毛や絹を用いた高級なものもあったが、その多くにはおもに紙が用いられていた。

表2-1は、1912～21年における扇子の生産額動向を示しているが、前掲の表1と同様に、統計資料としては極めて不備があることを認めざるをえない。ただし、以下のような傾向を見出すことは可能であると考えられる。すなわち、広東省における扇子の生産量が激増して中国全体の約8～9割を占めていた1915年と1917年を除くと、全体として扇子の生産額は急激に減少しつつあったものの、逆に、浙江省と江蘇省では跛行的ながらもむしろ増加しており、しかも、

浙江省は一貫して生産額において上位にあった。統計数値が明らかになっている1912～19年のうち、1914年、1915年、1917年の3年以外は浙江省が全て第1位を占めていた。

また、『支那経済全書』（1908年）によれば、中国の「扇子並ニ団扇」で最も有名な生産地は華中の江蘇省蘇州市と浙江省杭州市であり、華南の広東省や福建省においても生産されているが、蘇州市や杭州市のものよりも粗末で大きかったという^(注36)。

ところが、『支那省別全誌』（1917年）によれば、「広東扇の精巧なる実に驚く計りにして年々当地より支那各地及び海外に輸出せらるゝもの少からず」とされているが、その多くは「葵木の葉」で作られた葵扇だったという^(注37)。

次に、表2-2～6は、1930年代中頃の主要な各省における扇子の生産動向を示している。ただ、データの欠落しているところがいくつか見られる上に、前掲の表2-1とは逆に生産額が全く示されていないために、表2-1とは単純に比較することを困難にしている。また、扇子の中には紙（土紙）を用いた紙扇以外にも様々な種類が含まれていたことがわかる。さらに、扇子の販売単価も地域ごとの格差が大きく、紙扇の中で単価が最も高かった江蘇省江寧県の紙扇は、最も安価な浙江省黄巖県の紙扇と比べると、その価格差は30倍余りにも達していた。ただし、扇子全体の生産量では江蘇省が最も多く、これに浙江省さらに江西省が次いでいた。この点は、上述の1912～21年の流れを継承していたと見なすこともできる。

表2-1 1930年代前半における扇子の生産額動向（1912～21年）（単位：元）。
Table 2-1 Production of fan in the former of 1930s, 1912 – 1921.

年度	合計	浙江省	広東省	四川省	江蘇省	湖北省	江西省
1912	921,193	253,533	174,212	144,593	76,820	71,753	24,768
1913	1,091,794	317,393	106,944	160,448	88,410	53,804	79,435
1914	1,173,597	330,609	106,044	185,032	30,952	113,556	361,059
1915	5,190,106	317,401	4,376,768	—	88,112	278,116	79,904
1916	700,504	356,124	—	—	91,699	113,450	80,027
1917	4,928,275	106,715	4,606,446	—	99,147	58,071	11,784
1918	583,259	369,882	—	—	109,728	59,613	11,785
1919	555,476	400,764	—	—	126,080	—	—
1920	162,868	—	—	—	136,324	—	—
1921	—	—	—	—	138,128	—	—

典拠）表1に同じ。

そこで、以下では、主に表2-2～2-6を参照し、また可能な限り文献資料をも利用しながら、江蘇省・浙江省・江西省・河南省などを中心に、各省ごとの扇子の生産状況を見ていきたい。

2) 江蘇省

まず、表2-2を見てみると、江蘇省では、扇子の製造に従事する従業者数が同省内で最も多く、かつ生産量が全国で最も多かったのが呉県だったことがわかる。呉県で生産されて販売されていた扇子には紙扇・竹扇・絹扇の3種類が含まれているが、その単価は不明である。そして、これに単価が全国で最も高かった江寧県の紙扇がついでいた。

呉県では、清代になると、県城区の閭門・桃花塢一帯で扇子の生産が盛んになり、1937年には「扇骨作坊」が60軒（従事者300人余り）、「扇面作坊」が16軒（従事者104人）となり、120万枚の「扇面」が作られたが、日本軍が侵略してからは日本の扇が蘇南市場を制覇するようになった^(注38)。

蘇州では、民国初年には扇子の「作坊」が桃花塢から四街付近まで拡大・発展するとともに、揚州から扇子の生産・販売を行う「扇莊」が蘇州へ遷ってきて、後に揚州幫と呼ばれるようになった。こうして、民国期には蘇州の扇子は四川省・河南省・山東

省などの国内ばかりでなく、日本へも輸出されるようになった。だが、1920年代末には日本の扇が大量に東北へ流入したために、蘇州の扇子の販売に打撃を与えた^(注39)。

3) 浙江省

表2-3を見てみると、浙江省黄巖県では、扇子を製造する従業者数が上述の江蘇省呉県（江蘇省内において扇子を製造する従業者数が最も多かった県）の2倍強にあたる3,000人となっていたが、扇子の生産量は150本（誤記か）と江蘇省呉県に比して非常に少なく、扇子の販売単価も最も低かった。これに対して、杭県における従業者数は黄巖県の15分の1、江蘇省呉県の7分の1にすぎなかったが、紙扇の生産量は黄巖県よりはるかに多く、呉県の5分の1だった。なお、江山県では、軒数が100軒、従業者数が100人だったことから、仕事場・作業場に賃金労働者を雇傭したのではなく、家内手工業として行われていたと考えられる。

また、別の資料によれば、1911年に紹興県（当時は会稽県）では6万本の扇子が作られ、1948年には約300万本の扇子の骨（扇骨）が作られた^(注40)。

杭州市の扇子は種類が多かったが、扇骨には青竹・檀香・冲牙・光漆・棕竹・湘妃などがあり、そ

表2-2 1930年代前半における江蘇省製扇業一覧表。

Table2-2 Producers of fan in Jiangsu Province in the former of 1930s.

県名	軒数	従業者数	資本金額	販売製品	年生産量	販売単価
宿遷	7	15人	300元	紙扇、蒲扇	36,000本	0.05元
呉県	314	1,409人	—	紙扇、竹扇、絹扇	1,020,000本	—
江寧	70	850人	—	紙扇	1,000,000本	0.77元

典拠)『中国経済年鑑』続編（1935年、商務印書館）第12章、227頁より作成。ただし、表中の「—」は不明であることを示している。

表2-3 1930年代前半における浙江省製扇業一覧表。

Table 2-3 Producers of fan in Zhejiang Province in the former of 1930s.

県名	軒数	従業者数	資本金額	販売製品	年生産量	販売単価
杭県	6	200人	100,000元	紙扇	200,000本	—
紹興	12	112人	3,000元	紙扇	50,000本	—
黄巖	130	3,000人	5,000元	紙扇、蒲扇	150本	0.03元
江山	100	100人	1,000元	麦桿扇	—	0.25元
永康	60	120人	600元	麦桿扇	14,000本	0.06元

典拠) 表2-2に同じ。

の大部分は浙江省外の上海・蘇州・広東・広西・福建・湖南などの各地から移入されていた。ただし、杭州市における扇業は電機扇風機が流行してからは衰退するようになった^(注41)。

扇子は杭州市の主要な工芸品の1つで、城内に数千軒の製造者がおり、そのうち油紙扇の製造者が最も多く、900軒余りに及んだ^(注42)。

杭州市の扇子（紙扇）の扇面に用いられていた土紙の一種である桃花紙は、浙江省内の於潜県（1958年に昌化県に編入）や昌化県（1960年に臨安県に編入）などから移入されていた^(注43)。

なお、江山県では土紙が生産されており、戦時中の1940年には42,000本の麦桿扇が生産されたというが、文献資料には紙扇の生産に関する記載は全く見られない^(注44)。

4) 江西省

表2-4を見てみると、江西省では、遂川県の扇子生産従業者数が中国の中で最も多く、上述の浙江省黄巖県の2倍弱、江蘇省呉県の4倍余りとなっているが、生産量はそれほど多くはなかった。

泰和県の油紙扇は、清朝乾隆年間には県城西部の姚家村で作られたものが有名になり、その後、その付近の王村や曾村などにも生産が広がり、民国期には生産量が100万本余りに達し、省外へも移出された^(注45)。

そもそも、遂川県における扇子作りの技術は、清代初期の1664年に広東人によって伝えられたという。すなわち、遂川県大汾江夏村の白石坑で家内副業として扇子の生産が始まった。そして、民国期には泰和県大汾の大部分の村にも普及した^(注46)。

5) 河南省

表2-5を見てみると、華北に位置する河南省では、上掲の華中諸省と比較すると、扇子の生産ではその軒数・従業者数・資本額・生産量のすべてにおいて低かった。しかも、新編県志には、扇子の製造に関する記述を見ることはできない。

6) その他

表2-6を見てみると、以上に取り上げた諸省以外において扇子の生産量が多かったのは湖南省臨湘県だったが、そこにおいて生産されていたのは扇骨であって紙（土紙）とは関係なかったし、寧夏省において製造されていた毛扇と草扇も紙を原料の一部として用いていたとは考えにくい。また、広東省陽山県では従業者数がわずか12人（1軒当たり2人）にすぎず、その販売単価も前述の浙江省黄巖県について低かったし、同時に葵扇も生産されていたことから、紙扇がどれほど生産されていたのかは不明である。なお、山東省臨邑県も従業者数が15人にしかすぎなかった。

表2-4 1930年代前半における江西省製扇業一覧表。

Table 2-4 Producers of fan in Jiangxi Province in the former of 1930s.

県名	軒数	従業者数	資本額	販売製品	年生産量	販売単価
泰和	20	220人	2,400元	油紙扇	100,000本	0.07元
遂川	500	5,770人	120,000元	摺扇	30,000本	0.08元

典拠) 表2-2に同じ。

表2-5 1930年代前半における河南省製扇業一覧表。

Table 2-5 Producers of fan in Henan Province in the former of 1930s.

県名	軒数	従業者数	資本額	販売製品	年生産量	販売単価
濬県	10	40人	1,000元	紙扇	—	0.06元
博愛	12	52人	1,500元	紙扇	9,000本	—
滑県	12	100人	4,200元	紙扇	2,550本	0.08元

典拠) 表2-2に同じ。

表2-6 1930年代前半における広東省・湖南省・山東省・寧夏製扇業一覧表。

Table 2-6 Producers of fan in Guangdong Province etc. in the former of 1930s.

省名	県名	軒数	従業者数	資本金	販売製品	年生産量	販売単価
広東	陽山	6	12人	—	紙扇, 葵扇	—	0.04元
湖南	臨湘	50	230人	1,500元	扇骨	100,000本	0.08元
山東	臨邑	5	15人	600元	紙扇	15,000本	0.10元
寧夏	靈武	2	6人	—	毛扇, 草扇	—	5.50元

典拠) 表2-2に同じ。

ただし、広東省の扇子は、広州・江門・汕頭などから多数輸出され、1932年の輸出額は6.3万両で、中国全体の8割余りを占めていたというから^(注47)、改めて、この統計資料が極めて不備であることがわかったとともに、扇子についても実際の生産量は統計数値として表れていた以上だったことも窺い知ることができる。

7) 小 括

扇子の単価には大きな較差が見られ、その品質にもかなりの格差があったと考えられる。また、土紙がおもに山間部の農村において生産されていたのに対して、扇子は原材料の土紙を購入して都市部ないし都市近郊農村において製造されていた。

IV. 箔 (金・銀・銅・錫)

ここでは、まず、統計資料から箔類の生産動向を

概観し、ついで、箔類の主要な生産地のうち、文献資料から概況を知ることができる浙江省と広東省における箔類の生産動向を見ておきたい。

1) 概 況

錫箔の用途は、おもに迷信 (宗教儀式) 用であり、南京国民政府が展開した「迷信打破」運動などによって、排斥の対象となることも多かった。すなわち、錫箔に用いられた土紙は、洋紙との競合というよりもむしろ「近代」化の推進の中で排除されていった面が多かったと考えられる。ただし、近年、迷信用の「焼紙」(銀紙で作った銀両や紙幣の形状をとっている) が復活しているようである^(注48)。

表3-1を見てみると、1912～21年における金銀箔類の生産は、同期間中で最も生産額が多かった1912年には、広東省が全体の93%余りを占めており、1915年から激減しているのは、広東省の生産が激減したことによると見なすことができる。また、1915～21年で最も生産額が多かったのは1917年で、江西省が

表3-1 1912～21年における金銀箔類の生産額動向 (単位: 元)。

Table 3-1 Production of foil in China, 1912 - 1921.

年度	合計	江蘇省	広東省	浙江省	河北省	江西省	福建省	湖南省
1912	41,851,074	93,589	39,069,188	1,067,387	617,920	439,112	145,879	120,790
1913	40,642,176	143,956	38,827,893	539,398	150	578,124	291,799	18,347
1914	39,415,907	27,940	38,827,953	146,038	18,273	8,842	97,798	21,434
1915	1,857,406	78,816	475,297	149,075	6,740	627,439	253,127	42,652
1916	1,808,892	71,698	—	700,094	1,950	680,519	308,732	18,130
1917	2,593,535	77,696	492,925	635,447	957	887,014	330,072	148,170
1918	2,158,968	213,563	—	679,840	993	887,023	357,287	7,215
1919	1,544,185	322,770	—	697,592	1,101	—	508,871	—
1920	390,359	374,572	—	—	627	—	—	—
1921	—	397,243	—	—	—	—	—	—

典拠) 表1に同じ。

最も多く、これに浙江省が次ぎ、さらに広東省がこれに次いでいた。さらに、1915年以降、広東省と河北省では激減していったのに対して、江蘇省・江西省・福建省ではむしろ増加していた。

2) 浙江省

錫箔は浙江省の特産で、杭州・紹興・寧波が主要な生産地となっており、江蘇・山東・河北・湖北・湖南の各省に広く販売されていた^(注49)。

1915年の調査によれば、浙江省紹興における「錫箔及錫器」の製造者は約500戸で、「錫箔及錫器」の生産額は合わせて年間120万元に達し、その製品は安徽省・浙江省・江蘇省の各地に移出されたという^(注50)。だが、ここには錫器が含まれており、これでは土紙を原材料の一部とする錫箔の生産者と生産額が不明である。

そこで、再び表3-1を見てみると、浙江省における1912年の箔類（錫箔と錫器）の生産額は106万元余りとなっていることから、錫箔の生産が大部分を占めていたと考えられる。

また、表3-2を見てみると、1912～17年のうち、錫器の移輸出は1912～15年には全く無く、1916年と1917年にわずかに見られただけだったことから、やはり錫箔の生産が大部分を占めていたと考えられる。

さて、浙江省の土紙業が衰退しつつあった中において、「迷信」用としての「紙箔焼紙」と包装用の草紙・粗紙のみが中国国内紙業における地位を維持していたとされている^(注51)。特に、紹興県は錫箔の生産地として有名だった。

錫箔の原料は紙（土紙）と銀で、宗教儀式に用いられるために、投資家には注目されなかったが、民国期になってからは、その他の紙関連製品とは対照的に、錫箔の売れ行きが良くなった。1931年にはその販売総額が1,500万元余りとなったために、急に金融業の貸付の的となった。しかも、錫箔は浙江省紹興県の商業の中でも重要な位置を占めており、その製造過程は、非常に複雑で、すべて手作業で行なわれ、機械を使用することができなかった。「打箔」という作業は男子によって行われたが、それ以外の「掲錠」、「梢紙」、「研紙」などの作業は、老弱男女を問わず、家内手工業として行なわれていた。しかも、それらは兼業として行われ、道具が簡単で、製造も簡単だったために、紹興県の無産階級の人々は、錫箔の製造に従事していた。ちなみに、浙江省民政庁の調査によると、1931年における紹興県の総人口は130万人で、そのうちの15%が錫箔に関連する仕事に従事して生計を立てていたという。そして、錫箔を製造する「箔舗」は1,100戸余りあり、また、製造された錫箔を外地に販売する「箔荘」は30戸余りあり、これらの箔舗と箔荘に関わった人は紹興県の総人口の5%を占めていた。このような箔商人の中には、江蘇省や上海市などにおいて「箔号」を設立し、小売り販売に従事した者も多かった。このように、錫箔業は、社会経済に密接な関係を持っていた。錫箔は、滬杭路（上海・杭州間の鉄道路線）の一带およびその内地に販売され、江蘇省各県への販売量が最も多く、清明節・中元・冬至・年末の4つの時期に最も売れ行きがよかった^(注52)。

表3-2 浙江省における錫箔・錫器の移輸出動向(1912～17年).
Table 3-2 Production of tinfoil in Zhejiang Province, 1912 - 1917.

年代	錫箔							錫器	
	寧波より		寧波常関より	杭州より		全国移輸出量	全国移輸出額	寧波より	
	担	海関両	担	担	海関両	担	海関両	担	海関両
1912	9,543	305,370	12,087	114	3,710	99,858	1,762,903	—	—
1913	11,825	390,231	11,397	58	2,552	104,815	1,930,288	—	—
1914	10,206	346,990	15,177	-	-	120,625	2,128,433	—	—
1915	12,221	452,191	16,026	103	4,522	140,154	3,878,521	—	—
1916	12,478	499,123	9,451	352	6,084	123,775	3,101,994	4	214
1917	9,920	396,800	-	303	7,028	122,451	2,467,643	17	1,021

典拠)『支那省別全誌(浙江省)』(1919年)第7編第5章(紹興及蕭山に於ける工業)677頁より作成。

3) 広東省

広東省の金箔・銀箔・銅箔・錫箔は「四箔」と総称されているが、「皺金」(表面にしわを作っている金紙)や銅箔で作られる「金花」は三角形をしており、主要な生産地は仏山・潮州・広州・番禺・江門などであった。そもそも箔の生産は明代初期に江蘇省・浙江省から伝播し、清朝同治年間に最盛期をむかえ、従業者は8,000人余りにも達した。製品としては銅箔と錫箔が多く、銅箔は金花や装飾品を作るのに用いられ、錫箔は主に「冥鏹」(死者のために焼く紙銭)を作るのに用いられ、海外ではおもに東南アジアのシンガポール・マレーシア・インドネシア・タイ・ミャンマー・香港・澳門などにも輸出された。だが、抗日戦争期には販路が激減し、80%までが操業停止に追い込まれた^(注53)。

仏山県では、四箔とりわけ銅箔を原料とする金花・皺金の生産が盛んで、清代に最盛期をむかえていたが、アヘン戦争以降には衰退し始めた^(注54)。

仏山県では、銅箔で作られる金花の生産に従事する者は、1906～15年には2,700人余りに達していたものの、抗日戦争前には1,000人余りに減少してしまった。また、「皺金紙」の生産量も1,200万枚余りとなってしまう、さらに、抗日戦争期には従業者が500人余りにまで減少してしまったが、それでもなお年間500万枚余りの「皺金紙」が生産されていた^(注55)。

4) 小 括

錫箔を中心とする箔類の製造は、爆竹や扇子に比べて、地域的にはかなり限定されており、おもに「迷信」用の「焼紙」として使用されていたために、洋紙との競合関係は全く見られなかったが、逆に、南京国民政府による迷信打破運動の主要な批判対象となり、打撃を受けた。

V. おわりに

爆竹・扇子・箔などの土紙を主要な原材料とする製品の生産は、近代以前から土紙業の伝統がある浙江省や江西省などにおいては近代以降も盛んだったが、さらに、中華民国期になってからはより一層その生産が拡大する省もあった。

このように、爆竹・扇子・箔の生産は、同じく土紙を主要な原材料として用いながらも、そこには差

異も見られた。とりわけ、錫箔はおもに「迷信」用の「焼紙」として使用されていたために、洋紙との競合関係は全く見られなかった。また、土紙の生産地として有名だった浙江省は、その土紙を材料として用いた紙製品の生産地としても有名だったが、紙関連製品とその原料紙は主要な生産地がほとんど一致していなかった。ただし、紙傘や紙箔などの生産ないし販売に従事した人は相当数にのぼり、地域経済にかなりの影響を持っていたことが推測できる。そして、これらの製品の土紙に対する需要も土紙の根強い生産を維持することにつながっていたと言える。

注

- (1) 近代中国における手工製紙業の動向については、拙稿「近代中国における在来製紙業の展開」(鹿児島国際大学附置地域総合研究所『地域総合研究』第34巻第1号, 2007年9月), 同「近代浙江省における手工製紙業の展開」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第39号, 2008年2月), 同「近代江西省における手工製紙業の展開」(同『日本海域研究』第40号, 2009年2月), 同「近代福建省における手工製紙業の展開」(同『日本海域研究』第41号, 2010年2月)を参照されたい。なお、近代中国における土紙業に関する研究動向及び関連資料などについては、拙稿「近代中国における手工製紙業に関する研究と資料について」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究叢報』第29号, 2007年3月)を参照されたい。
- (2) 拙稿「近代中国における紙傘の生産をめぐって」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第43号, 2012年3月)を参照されたい。
- (3) 江西省万載県志編纂委員会編纂『万載県志』(江西人民出版社, 1998年) 295頁, 醴陵市志編纂委員会編『醴陵市志』(湖南出版社, 1995年) 262頁。
- (4) 広東省地方史志編纂委員会編『広東省志』二軽(手)工業志(広東人民出版社, 1995年) 251頁。
- (5) 前掲書『万載県志』295頁。ただし、その原典は、江洪『煙花爆竹生産与安全』(軽工業出版社, 1980年)である。
- (6) 実業部国際貿易局編『中国実業誌(湖南省)』(1937年)第7編第8章, 426～427頁。
- (7) 同上書, 427頁。

- (8) 瀏陽県地方志編纂委員会編『瀏陽県志』(中国城市出版社, 1994年) 555頁。
- (9) 前掲書『中国実業誌(湖南省)』(1937年) 第7編, 427頁。
- (10) 前掲書『醴陵市志』262頁。
- (11) 前掲書『中国実業誌(湖南省)』第7編, 428頁。
- (12) 同上書, 428頁。
- (13) 同上書, 444～445頁。
- (14) 前掲書『瀏陽県志』519頁。
- (15) 湖南省瀘溪県志編纂委員会編『瀘溪県志』(社会科学文献出版社, 1993年) 293頁。なお, 同書は, 湖南銀行経済研究室編『瀏醴之鞭炮』(1940年)・湖南省経済調査所『湖南省之爆竹』(1934年から1935年)を典拠として挙げているが, それらは所蔵地不明のために筆者は未見である。
- (16) 衡陽県志編纂委員会辦公室編『衡陽県志』(黄山書社出版, 1994年) 162頁。
- (17) 注(8)を参照されたい。
- (18) 注(5)を参照されたい。
- (19) 萍郷市志編纂委員会編『萍郷市志』(方志出版社, 1996年)。
- (20) 宜春市地方志編纂委員会編『宜春市志』(南海出版公司, 1990年) 325頁。
- (21) 前掲書『万載県志』298頁。
- (22) 実業部国際貿易局編『中国実業誌(浙江省)』(1933年) 第7編第6章, 373頁。
- (23) 金華県志編纂委員会編『金華県志』(浙江人民出版社, 1992年), 蘭谿市市志編纂委員会編『蘭谿市志』(浙江人民出版社, 1988年), 《麗水市志》編纂委員会編『麗水市志』(浙江人民出版社, 1994年), 松陽県志編纂委員会編『松陽県志』(浙江人民出版社, 1996年)。
- (24) 前掲書『中国実業誌(浙江省)』374～375頁。
- (25) 前掲書『広東省志』251～252頁。
- (26) 台湾総督府臨時南支調査局『広東省調査書』南調第2号(1938年) 105頁。
- (27) 上海中支建設資料整備事務所『広東省調査報告書—基本工業・特殊工業・農村副業—』編訳彙報第78編(1942年) 89～90頁。なお, 同書は, 国民経済建設運動委員会広東分会『広東省基本工業, 特殊工業, 農村副業調査報告書』(1937年)の邦訳である。
- (28) 東莞市地方志編纂委員会編『東莞市志』(広東人民出版社, 1995年) 404～405頁。
- (29) 南海市地方志編纂委員会編『南海県志』(中華書局, 2000年) 673頁。
- (30) 仏山市地方誌編纂委員会編『仏山市志』(広東人民出版社, 1994年) 1142頁。
- (31) 潮州市地方志編纂委員会編『潮州市地方志』(広東人民出版社, 1995年) 346頁。
- (32) 前掲書『広東省志』256頁。
- (33) 前掲書『潮州市地方志』347頁。
- (34) 実業部国際貿易局編『中国実業誌(山東省)』第8編(1934年) 694頁。
- (35) 同上書, 695～696頁。
- (36) 東亜同文会『支那経済全書』第12輯(1908年) 678頁。
- (37) 東亜同文会『支那省別全誌』第一巻広東省附澳門(1917年) 882頁
- (38) 呉県地方志編纂委員会編『呉県志』(上海古籍出版社, 1994年) 484頁。
- (39) 蘇州市地方志編纂委員会編『蘇州市志』(江蘇人民出版社, 1995年) 180～181頁。
- (40) 紹興市地方志編纂委員会編『紹興市志』(浙江人民出版社, 1996年) 873頁。
- (41) 「杭市之扇業」(『工商半月刊』第6巻第16号, 1934年8月15日, 国内経済) 94頁。
- (42) 東亜同文会『支那省別全誌』第十三巻浙江省(1919年) 633頁。
- (43) 『中国経済年鑑』(1934年, 商務印書館) 第11章, 845～846頁。
- (44) 江山市志編纂委員会編『江山市志』(浙江人民出版社, 1990年) 204頁。
- (45) 泰和県地方志編纂委員会編『泰和県志』(中共中央党校出版社, 1995年) 637頁。
- (46) 《遂川県志》編纂委員会編『遂川県志』(江西人民出版社, 1996年) 493頁。
- (47) 台湾総督府臨時南支調査局『広東省調査書』南調第2号(1938年) 105頁。ただし, 広州市地方誌編纂委員会編『広州市志』(広州出版社, 1995～2000年), 江門市地方誌編纂委員会編『江門市志』(広東人民出版社, 1998年), 広東省汕頭市地方誌編纂委員会編『汕頭市志』(新華出版社, 1999年)には扇子に関する記載がほとんど見られない。前掲書『広東省志』二 軽(手)工業志(広東人民出版社, 1995年) 289頁には広東省の紙扇の生産地として仏山県と興寧県が挙げられている。
- (48) 筆者が1996年に浙江省富陽県を訪問した際に, 老婆が「焼紙」を製造・販売していたのを見た。また, 弁納

才一・周如軍「中国華東地域訪問記録－2010年2月・3月－」（『金沢大学経済論集』第31巻第1号，2010年12月）205頁および弁納才一「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月，江蘇省・上海市の農村」（『金沢大学経済論集』第29巻第1号，2008年12月）297頁，同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月，江蘇省・上海市の農村」（『金沢大学経済論集』第29巻第2号，2009年3月）423頁などにも，「焼紙」に関する記録が見える。

(49)「杭州箔業調査」（実業部国際貿易局編輯『工商半月刊』第1巻第14期，1929年7月15日，調査）30頁。

- (50) 東亜同文会『支那省別全誌（浙江省）』（1919年）第7編 676頁。
- (51)「浙江省紙業之衰落」（中国銀行総管理処調査部『中行月刊』第4巻第5期，1932年5月）90頁。
- (52)「紹興箔業概況」（『中行月刊』第4巻第6期，1932年6月）123頁。
- (53) 前掲書『広東省志』247頁。
- (54) 前掲書『仏山市志』1131頁。
- (55) 前掲書『広東省志』247～248頁。